＜要旨＞

「ふくおか教育論文」

若年教員の授業実践力を育む主幹教諭の働きかけの一方途

個別の授業実践プランを用いた指導を通して

うきは市立山春小学校
主幹教諭　矢野　沙織

こんな手立てによって…

若年教員の特性や思いを基に作成した授業実践プランを、一単元の授業構想、授業展開、授業の評価・改善に活用することを考えた。

こんな成果があった！

若年教員が授業づくりに没頭でき、授業実践に対しての活力や熱意が高まる環境をつくることができ、若年教員の授業実践力を向上することができた。

１　考えた

本校の経営課題の一つに「実践的指導力の向上」が挙げられている。その背景の一つとして、小規模校である本校にも新規採用職員が二年に一人は採用されており、教職経験の少ない若年教員の割合が増えていることも考えられる。

そこで、経営課題の解決に向けて若年教員の特性や思いを基に授業実践プランを主幹教諭が作成し（指導計画は若年教員と一緒に作成）、それを一単元の授業実践で活用することで、若年教員の授業実践力を育むことができると考えた。

２　やってみた

まず、本校の若年教員２名（若年教員Ａ一年目、若年教員Ｂ五年目・研究主任）の特性や思いを基に、若年教員Ａは、４年社会科「ごみはどこへ、水はどこへ」の単元における指導計画を作成し、「一時間の中で、子供が何を考え、何をノートに書くのかを明確にする」という目標を設定した。若年教員Ｂは、３年算数科「たし算とひき算」の単元における指導計画を作成し、「全ての子供が、課題解決のための見通しをもつことができる」という目標を設定した。次に、主幹教諭が若年教員Ａ，Ｂの目標を基に、実践段階ごとに支援計画と評価計画を作成し、若年教員Ａ、Ｂが授業づくりに没頭でき、授業実践に対しての活力や熱意が高まる環境を創った。

３　成果があった！

・ 実践後における授業チェックリストの各展開段階の評価が、実践前と比べて、全ての段階においてポイントが上がった。特に、若年教員Ａ、Ｂともに重点的に取り組んだ導入段階と展開段階においては、ポイントの伸びが他の段階に比べると大きくなった。

・ 主幹教諭が、若年教員の課題やニーズに応じたコーディネートや目標に応じた週案活用の工夫、若年教員の実態に応じたリフレクションの工夫を行うことで、若年教員が授業づくりに没頭でき、授業実践に対しての活力や熱意が高まる環境を創ることにつながった。

＜目次＞

若年教員の授業実践力を育む主幹教諭の働きかけの一方途

個別の授業実践プランを用いた指導を通して

１　主題設定の理由 ……………………………………………………… ３
（１）現代社会の要請から ……………………………………………… ３
（２）本校の人材育成構想の面から ………………………………… ３
（３）令和の日本型教育の充実の面から ……………………………… ４

２　主題の意味 ………………………………………………………… ５
（１）「若年教員の授業実践力」とは ………………………………… ５
（２）「若年教員の授業実践力を育む主幹教諭の働きかけ」とは ……… ６
（３）「授業実践プラン」とは ………………………………………… ７
（４）「個別の授業実践プラン」とは ………………………………… ８
（５）「個別の授業実践プランを用いた指導を通して」とは …………１０

３　研究の目標 …………………………………………………………１０

４　研究の仮説 …………………………………………………………１０
（１）研究仮説の内容 …………………………………………………１０
（２）研究仮説の検証の方途 …………………………………………１１

５　研究の構想 …………………………………………………………１１
（１）若年教員の課題やニーズに応じたコーディネートの工夫 ………１１
（２）設定した目標に応じた週案の活用の工夫 ………………………１２
（３）若年教員の実態に応じたリフレクションの工夫 ………………１２

６　研究の実際 …………………………………………………………１３
（１）実践Ⅰ（若年教員Ａの授業実践プランを活用した社会科の授業づくり） ……１３
（２）実践Ⅱ（若年教員Ｂの授業実践プランを活用した算数科の授業づくり） ……１９

７　全体考察 ……………………………………………………………２４
（１）若年教員の授業実践力の高まりについて ………………………２４
（２）成果 ………………………………………………………………２４
（３）課題 ………………………………………………………………２５
＜参考文献＞ …………………………………………………………２５

＜本文＞

若年教員の授業実践力を育む主幹教諭の働きかけの一方途

個別の授業実践プランを用いた指導を通して

うきは市立山春小学校
主幹教諭　矢野　沙織

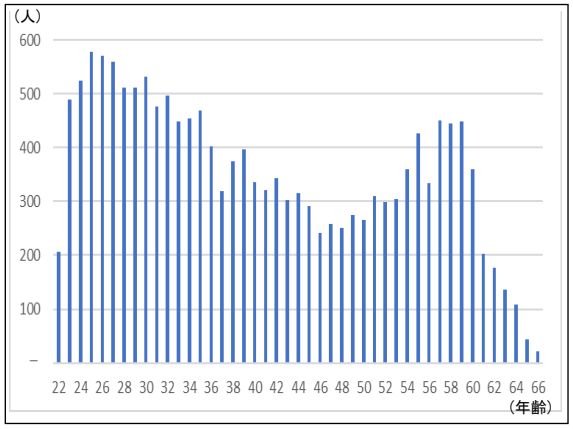
１　主題設定の理由

（１）現代社会の要請から

近年の大量退職に伴い、新規採用者数の増加が続いている。資料１は、福岡県の令和４年度小学校教職員年齢別人員構成（学校教員統計調査令和４年度中間報告）である。このグラフから、福岡県においても、ベテラン教員の大量退職が続くことだけではなく、退職者数以上に若年教員が新規に採用されていることが分かる。小規模校である本校にも２年に１人は新規採用職員が配置されており、担任数で比較すると、８学級（特別支援学級２を含む）の内、４名が 20 代の教員である。

このような現状から、以前は当たり前のように行われていた、先輩教員から若年教員への知識・技能の指導、伝承が十分に機能しなくなり、不安を抱えながら教壇に立つ若年教員も少なくはない。

以上のことから、子供の充実した学びを保障し、学校現場が持続的かつ魅力的な組織であり続けるためにも、若年教員の育成を図ることは喫緊の課題であると言える。



【資料１　Ｒ４福岡県小学校教職員年齢別人員構成】

（２）本校の人材育成構想の面から

本校の経営課題の一つに「実践的指導力の向上」が挙げられている。その理由として以下の点が本校職員に示されている。

- 子供のつぶやきや反応を生かしながら授業を展開することが十分ではない
- 一単位時間の主眼達成の具体的な子供の姿を明確にすることが十分ではない
- 「今年はこの教科を重点に！」という目標をもって、学習指導力を高めてほしい
- 若年教員に関わることを通して、自分のスキルアップにつなげてほしい

これらを踏まえ、作成されたものが「人材育成構想」（４頁資料２）である。そこで、主幹教諭として取り組むことができると考えたのが、実践力に関する「若年教員の学習指導力を効果的に育成すること」（資料２赤枠囲み）である。ここに示された「効果的な育成」を具体化することが本校の経営課題を解決することにつながると考える。

人材育成における重点課題	
◆ 若年教員の育成に関わることを通して、中堅教員やベテラン教員の「組織力」「実践力」「連携力」の更なる成長を促すこと	
◆ 組織力 一人一人のキャリアステージに応じた参画意識を高めること	◆ 実践力 若年教員の学習指導力を効果的に育成すること

人材育成に関する目標の重点	
組織力について	実践力について
○ 三部会におけるPDCAサイクルの実効性を高める参画の仕方を身に付けること ○ 管理職との面談を通して、キャリアステージに応じた目標設定をすること	○ 授業構想の段階で、毎時間のゴール像を明確にすること ○ 一人一人が自力解決できる工夫をすること ○ 基礎基本が確実に定着するように、個に応じた支援を充実させること

【　資料２　山春小学校における人材育成構想（抜粋）　】

（３）令和の日本型教育の充実の面から

「令和の日本型教育の構築を目指して(答申)」(令和３年１月　中央教育審議会)において、令和の日本型教育が目指す姿とは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現することと示された。個別最適な学びを展開するためには、これまで以上に子供の成長やつまずきなどの理解に努め、きめ細かな指導・支援をすることが教員に求められている。また、協働的な学びを展開するためには、集団の中に個が埋もれてしまわないように、子供一人一人のよさや可能性に気付き、それを学びに生かすスキル等が求められている。

これらの学びを実現するために、「子供の学び」「教員の姿」「子供の学びや教職員を支える環境」の三つが示されており、その中の「教員の姿」については以下のように示されている。

・環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けている
・子供一人一人の学びを最大限に引き出す教員としての役割を果たしている
・子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている

上記の教員の姿を目指すために、私たち教員は、学校において求められる立場、役割、資質・能力に応じた研修等をとおして、自らの指導力を向上させていかなければならないのである。このことは若年教員にとっても同じである。しかし、若年教員は日々の担任業務や生徒指導、保護者対応に追われたり、何を、どのように学んだらよいのかが分からなかったりと、自らの指導力を向上させたくてもできない状況つまり、働きがいを感じることができない状況に置かれていることも少なくはない。

そこで、若年教員が子供たちと多くの時間を共有している授業実践に目を向け、授業実践で教員が身に付けるべきこと（目標）を明らかにし、実践→評価→改善を繰り返すことで、若年教員の指導力の素地を培うことができると考えた。そうすることで、自分自身の成長を感じ、次の実践意欲をもつこと、つまり働きがいを感じながら自らの指導力を向上させることにつながると考える。

２　主題の意味

（１）「若年教員の授業実践力」とは

> 採用五年目までの教員が、児童の特性や実情を把握した上で、教科の指導内容を理解し、その理解した内容等を授業として再構築し、ＩＣＴを活用したり、個に応じた支援を工夫したりしながら、構想した授業内容を実現する力のことである。

どんな若年教員も、教育に夢や希望をもって教壇に立つ。しかし、教員の大量退職、大量採用の影響により、以前のように先輩教員から若年教員への知識、技能の指導や伝承をする機会や時間が少なくなったり、日々の業務に追われたりする中で、「この指導でいいのか」「子供たちに寄り添うことができているのか」といった不安を抱えながら毎日を過ごしている若年教員も少なくはない。

そこで、主体的に学び続ける教員の育成を目指し、福岡県教育委員会は教職員として求められる資質・能力をキャリアステージごとに整理し、教員育成指標を策定している。その中で、教職員が児童生徒に関わる資質・能力を四つに整理している（図１）。

この中でも、若年教員が日々直面し、不安を抱いている「学習指導」に焦点をあて、授業実践力の向上を図るようにする。

学習指導の三つの資質・能力については以下のとおりである。

【授業評価と改善】

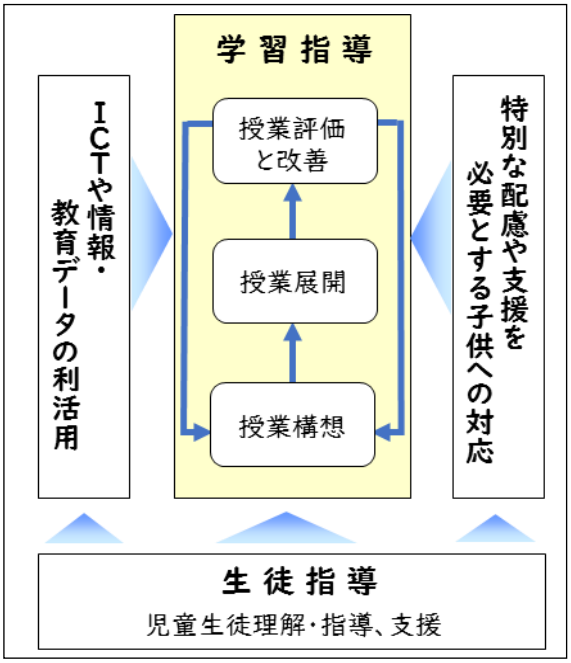
児童生徒の学びの状況を見取り、授業構想や展開を評価すること。

【 授 業 展 開 】

授業構想した内容から、発問や板書を考え、一時間の授業の中で実施すること。

【 授 業 構 想 】

目標（ねらい）と内容（教材）、方法（学習活動）を組み立て、指導計画をまとめること。



【図１　教職員の児童生徒に関わる資質・能力　】

上記の資質・能力の向上を図るためには、若年教員が経験したことのない未知の状況に対応したり、答えが決まっていない課題を追究したりする場面が含まれる。その際に必要になるのが、先輩教員や同僚との対話を通した学び合いである。若年教員が気軽に誰かに相談できる環境を整えることが、若年教員の資質・能力の向上を図る上で大切であると考える。

（２）「若年教員の授業実践力を育む主幹教諭の働きかけ」とは

若年教員が、安心できる環境で教育から活力を得ながら授業に没頭し、熱意をもって教育に取り組むことができる環境を主幹教諭が整えることで、自らの授業や指導の質を高めることができるようにすることである。

平成 30 年３月に福岡県教育委員会が示した「教職員の働き方改革指針」において、学校における働き方改革は、教員の働き方を見直し、教員が授業スキルを磨くことで、自身の人間性や創造性を高め、教育活動の質を向上させることを目的として取り組まれている。

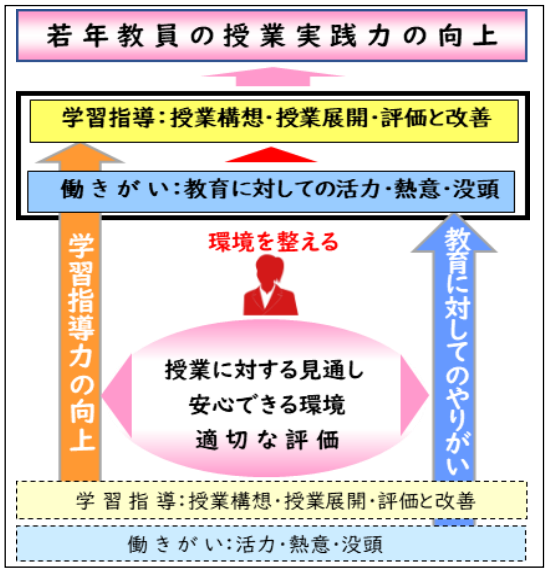
働き方改革について、愛媛大学教育学部教授、露口健司氏は以下のように述べている。

働き方改革というと、時間外勤務の削減や業務の効率化といった**「働きやすさ」**などに重きが置かれる傾向があるが、働く人が仕事から活力を得て、「この職場で働きたい」と仕事にやりがいを感じる**「働きがい」**も必要である。

露口氏が述べているように、働き方改革を進める上で、労働環境を整備する「働きやすさ」と仕事にやりがいを感じる「働きがい」の二つが必要であるが、本研究の対象は若年教員である。教育に夢や希望をもち、「子供のために」と尽力しようとしている若年教員には、教職に対して「働きがい」を実感させる必要がある。そこで、本研究では、特に「働きがい」に焦点をあて主幹教諭の働きかけを明らかにするものである。本研究での「働きがい」を以下の三つの視点から捉える。

◇　教育に**没頭**できる…仕事に熱心に取り組むことができる。
　　→授業に対する見通しをもち、意思をもって授業に臨むこと。
◇　教育に対する**活力**…教育から活力を得て、生き生きとしている。
　　→安心できる環境で、意欲的に授業に臨むこと。
◇　教育に対する**熱意**…教育にほこりとやりがいを感じている。
　　→適切な評価を行い、自信をもって授業に臨むこと。

若年教員が、働きがいを感じながら学習指導力を向上させるためには、安心して教育に取り組める環境で、授業に対する見通しをもちながら授業実践を積み重ねることや実践したことを適切に評価・改善し次の実践に向けて意欲を維持させることも必要である。このような環境を主幹教諭が整え、学習指導（授業構想、授業展開、評価と改善）について学んでいくことで、若年教員の授業実践力の向上が期待できると考える（図２）。



【図２　授業力向上に向けた主幹教諭の働きかけ　】

（３）「授業実践プラン」とは

授業実践に向けての見通しをもつために、若年教員が子供に対してどのような指導を行うのか（指導計画）、主幹教諭等が若年教員に対してどのような支援（支援計画）や評価（評価計画）をするのかを整理したものである。

若年教員が授業実践を行うにあたり、授業を計画通り展開すること、授業を時間内に終わらせることに意識が向いてしまい、子供は何ができるようになればいいのか、なぜこの活動を行うのかいった一単位時間でねらう目標や活動が曖昧になってしまうことがある。

そこで、若年教員が授業実践に没頭することができるように、一単位時間でねらう目標を設定し、その目標を基に授業を構想、展開し、授業の評価・改善を行う指導計画を若年教員と主幹教諭が一緒に作成する。また、主幹教諭は若年教員が安心して授業実践に臨み、活力を得ながら授業実践を行うために、どのような支援が必要なのかを示した支援計画を作成する。さらに、若年教員が熱意をもって授業実践をつなぐことができるように、何を評価するのかを示した評価計画を作成し、若年教員の実践指導力の向上を図ることができるようにする（表１）。

【　表１　授業実践プラン　】

	目標設定	授業構想	授業展開	授業評価と改善
没頭させるため				
指導計画	一単位時間の授業で、子供ができるようになることを設定する	目標を達成するために、授業内容と学習活動を組み立てる	授業構想を基に、主発問や板書を考え、一時間の授業の中で実施する	目標に対して、子供の姿や発言から学びの状況を見取り、構想や展開を評価、改善する
活力を与えるため				
支援計画	若年教員が感じている授業実践の課題を基に、一緒に目標を検討する	人・もの・ことをコーディネートし、若年教員が「これならできそうだ」という期待感をもたせる	設定した主活動に係る授業内容や発問等を検討する	授業実践プランに基づいて実践したことを称賛し、次時に向けての改善を検討する
熱意をもたせるため				
評価計画	自分の課題を生かして目標をつくっていることや目標を子供の姿で具体化できていることを評価する	目標に照らして、子供の思考つながりを意識して学習活動を具体化していることを評価する	子供の思考を促す発問や子供の発言が残る構造的な板書になっていることを評価する	授業の成果や課題を考えたり、次の実践に向けて課題を改善したりしているかを評価する

特に評価計画においては、以下の三つに基づいて評価をする。

・診断的評価…　どのような力が備わっているのか、どのような力が不足しているかを診断し、若年教員の課題意識をもたせるための評価　【目標設定の段階】

・形成的評価…　授業を実践していく中で、設定した目標に照らして、今何ができていて、何ができていないかを自覚させる評価　【授業構想・授業展開の段階】

・総括的評価…　授業実践後に、若年教員の最終的な授業実践到達度を判断し、次への実践に生かしていくための評価　【授業評価と改善の段階】

（４）「個別の授業実践プラン」とは

校長が示す「人材育成構想」を基に、若年教員の経験年数や特性に応じて作成した教科単元別の授業実践プランのことである。

本校の「人材育成構想」における重点課題の内容と目標と方策は以下のとおりである。

※　本校の人材育成における重点課題は、若年教員の学習指導力向上とそれを可能にする中堅やベテラン教員の連携を強化することであるが、本研究では若年教員に関する学習指導力の向上を重視する（資料３）。

重点課題	若年教員の学習指導力を効率的に育成する	
内　容	授業構想の段階で、毎時間のゴール像を明確にする	基礎･基本が確実に定着するように、個に応じた支援を充実させる
方　策	・めあてとまとめを週案に明記する ※若年教員Aで重視する ・見通しの視点を明確にする ※若年教員Bで重視する ・一人一人が自力解決できる工夫をすること	・振り返りのパターン化を図ること ・タブレットドリルを有効に活用すること ※若年教員Bで重視する

【　資料３　本校の若年教員に関する人材育成構想　】

上記の重点目標と方策及び本研究の対象若年教員Ａ、若年教員Ｂの特性を基に作成した授業実践プランを以下に示す。

若年教員A　一年目　4年生担任

・　他県において一年間の講師経験有。
・　若年研を進めるに当たり、社会科の授業づくりが難しいと悩んでいる。

◆本校の人材育成に関する重点課題を基にした学習指導の実態◆

・　教科書の指導書を基に、一時間の内容を構成しているが、子供に何を考えさせるのか不安を抱いている。
・　めあてとまとめのある授業を心掛けているが、教師主導で学習を展開することが多く、学習中の子供とのやり取りに悩みを抱えている。
・　机間指導に努め、子供の学習状況を把握することができているが、個別の支援の方法に悩みを抱えている。

第4学年　社会科「健康なくらしとまちづくり～ごみはどこへ、水はどこへ～」				
	目標設定	授業構想	授業展開	授業評価と改善
指導計画	一時間の中で、子供が何を考え、何をノートに書くのかを明確にする	一時間のめあてとまとめを考え、考えをつくる時間を位置付ける	自分の考えを書く前の発問を考え、子供の発言を板書する	発問後、何人の子供が自分の考えを書くことができたかどうかを見取る
支援計画	授業での子供の様子を一緒に振り返り、自分の課題がどこにあるのかを気付かせる	先輩教員の授業を参観する機会を設定し、一緒に単元計画や一時間の内容を考える	考えた発問を基に、子供の考えを想定させ、子供の思考を促す発問になっているかを一緒に検討する	授業実践プランに基づき、継続して実施できていることを賞賛し、今後の実践に向けての改善点を一緒に考える
評価計画	前時の課題を生かして目標を設定していることや子供の考えを想定していることを評価する	子供の課題意識に応じためあてになっていることや子供が考える内容が明確になっていることを評価する	発問後に、子供が思考する活動に取り組めていたことや子供の発言を整理して板書できていたことを評価する	考えを書く活動の成果と課題を見いだすことができていることや次に生かすことが具体化できていることを評価する

若年教員B 五年目 3年生担任	・　一昨年度から研究主任。 ・　授業や学級経営について、先輩教員に自分から積極的に相談し、常によりよいものを追究しようとしている ・　学級の子供に一日一回は声をかけることを心がけており、信頼関係を築くことができている。 **◆本校の人材育成に関する重点課題を基にした学習指導の実態◆** ・　週案に、1時間の学習内容を展開に沿って計画することができているが、単元計画に不安を抱いている。 ・　主発問や板書を構想し、テンポよく授業を展開することができているが、CD層児童への支援に不安を抱いている。 ・　机間指導に努め、子供の学習状況を把握しようとしているが、個別の支援の方法に悩みを抱えている。

第３学年　算数科　「たし算とひき算」				
	目標設定	授業構想	授業展開	授業評価と改善
指導計画	全ての子供が、課題解決のための見通しをもつことができる	**見通しをもつために、既習の振り返り**をする時間を設定する	既習を振り返り、**見通しを考える時間**と自力解決する時間を設定する	見通しを基に課題解決に向かう子供の数を見取り、**見通しのもたせ方の改善**を図る
支援計画	校内研究のテーマを基に、重視する活動は何かを一緒に考える	先輩教員に授業について相談する時間を設定し、一緒に単元計画や見通しについて考える	見通しをもつために必要な支援や自力解決後の交流の仕方を想定させる ★教員Bに任せる	見通しをもつまでの活動を工夫したことを称賛し、他者の意見を参考にしながら課題改善の具体を一緒に考える
評価計画	校内研究の副主題に応じた目標になっていることや見通しの内容を想定していることを評価する	単元一時間ごとの大まかな学習内容を想定できていることや何を振り返るのか具体化できていることを評価する	発問後、どれくらいの子供が自力解決に向かっていたかを評価する	見通しをもたせる活動の成果と課題を考え、具体化した改善策を具体的な場面で想定できることを評価する

個別の授業実践プランを作成するにあたって、ペーシングすることを重視して、以下の三つに留意した。

◇　若年教員が授業力を向上させたいと感じている教科から実践すること。
　→　若年教員の喫緊の課題に対応することで、その後の意欲へつなぐことができる。
◇　校内での職務や校内研究の機会を活用して実践をすること。
　→　若年教員の「孤独感」を解消し、共に学ぶ環境をつくることができる。
◇　経験年数に応じて、若年教員に「任せる」を取り入れること。
　→　自分で考えて、実践することができたという自信につなぐことができる。

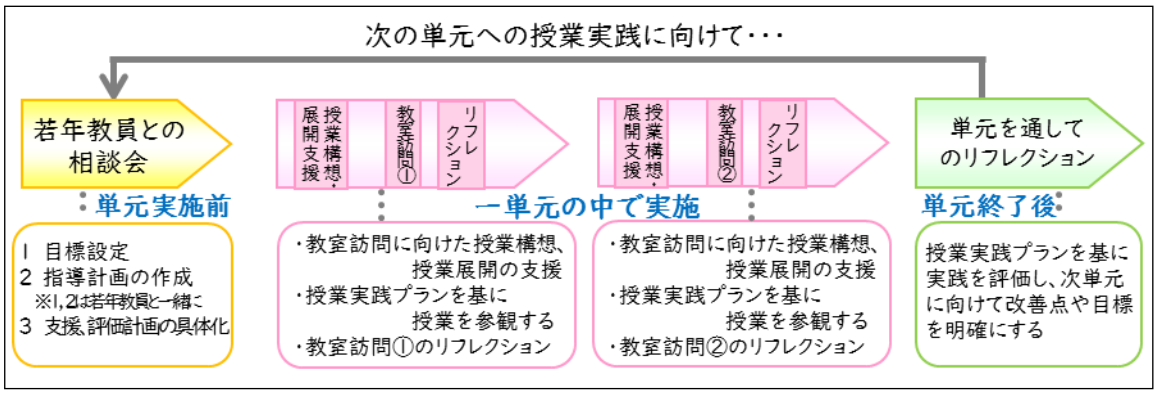
個別の授業実践プランは、若年教員の授業実践力を育むためのものであるが、それと同時に「よい授業がしたい」という若年教員の自己実現の欲求を満たすことにもつながると考える。このような若年教員の教育に対する思いが「やらされ感」につながらないよう、上記の三つを大事にし、個別の授業実践プラン（指導計画）を一緒に考える必要があると考える。

（５）「個別の授業実践プランを用いた指導を通して」とは

主幹教諭が、若年教員の授業構想、授業展開、授業の評価と改善といった授業づくりに関わり、若年教員がやりがいを感じながら授業実践に取り組むことができるようにすることである。

校内研究等で公開授業を行うことがあるが、その公開授業に全力を注ぎ、その後の授業が中途半端で終わることも少なくはない。そこで、単元を通して主幹教諭等が二回程度教室訪問を行うようにする。なお、訪問する授業に関しては、若年教員と相談し決定するようにし、目標に基づいて訪問する授業の授業構想や授業展開の支援を行うようにする（図３）。

※教室訪問以外の授業に関しての具体的な支援は、研究の構想で示す。



【図３　個別の授業実践プランを用いた主幹教諭の関わり　】

若年教員の授業実践力の向上を図るために、年間を通して育てるという視座から考えることが大事である。ただし、若年教員の多くは一つ実践をしたら手ごたえを持ちたいと思っている。そこで、一単元一実践において、どのように育成するかを重視して、本研究は実践をするものである。そのために、「個別の授業実践プラン」は若年教員の特性や課題に応じたものが必要となり、若年教員が納得するものが必要であると考える。

３　研究の目標

若年教員の授業実践力を育むために、個別の授業実践プランを用いた主幹教諭の働きかけの有効性を明らかにする。

以上の研究の目標を達成するために、以下の視点を重視した個別の授業実践プランを用いた働きかけの積み上げを図る。

視点１　若年教員の課題やニーズに応じたコーディネートの工夫　【没頭させるため】
視点２　設定した目標に応じた週案の活用の工夫　【活力を与えるため】
視点３　若年教員の実態に応じたリフレクションの工夫　【熱意をもたせるため】

４　研究の仮説

（１）研究仮説の内容

主幹教諭が、個別の授業実践プランを用いて、若年教員の課題やニーズに応じた人材をコーディネートしたり、週案を活用して目標達成に向けた助言をしたり、若年教員に合ったリフレクションを行ったりすれば、若年教員が授業づくりに没頭したり、授業に対して活力や熱意を高めたりする環境を創り出すことができ、若年教員の授業実践力の向上を図ることができるであろう。

（２）研究仮説の検証の方途

個別の授業実践プランの指導計画、支援計画、評価計画の有効性を図るために、北筑後教育事務所から出されている「授業チェックリスト」の一部を詳細化したものを作成し（資料４）、若年教員及び主幹教諭が実践前、実践後にチェックしたものを活用する。

◆若年教員Ａで重視する項目

⑤　課題意識を喚起するための工夫

⑥　子供の課題意識からめあてをつくる

⑧　見通しをもとに自分の考えをつくる

⑨　自力解決のための支援や机間指導

◆若年教員Ｂで重視する項目

⑤　課題意識を喚起するための工夫

⑥　子供の課題意識からめあてをつくる

⑦　課題解決や学習方法の見通しをもつ

⑧　見通しをもとに、自分の考えをつくる

⑨　自力解決のための支援や机間指導

若年教員授業チェックリスト～山春小学校Ver.～

４ あてはまる　３ どちらかと言えばあてはまる　２ どちらかと言えばあてはまらない　１ あてはまらない

展開	評価項目	評価
事前	① 子供がその時間に身に付けるべき資質・能力（主眼・ねらい）を明確にすることができる。	
	② 各教科の物事を捉える視点や考え方を意識して、授業づくりができる。	
	③ 子供が興味・関心をもつ教具（提示資料・具体物・ICT活用等）を設定できる。	
	④ ねらいにあった活動の時間配分を設定できる。	
導入	⑤ 子供の経験や知識のずれ等から課題意識を喚起するための工夫がある。	
	⑥ 子供の課題意識からめあてをつくることができる。（子供と一緒に・子供一人で）	
	⑦ 子供に課題解決や学習方法への見通しをもたせることができる。	
展開	⑧ 見通しをもとに、自分の考えをつくる活動を設定することができる。	
	⑨ 自力解決するための支援を準備したり、机間指導を行ったりすることができる。	
	⑩ 自分の考えを全体やグループで表現する場を設定することができる。	
	⑪ 子供の思考を促す発問（展開後段）をすることができる。	
	⑫ 子供の発言を整理しながら板書をすることができる。	
終末	⑬ めあてに対応したまとめをつくることができる。（キーワードを基に子供と一緒に・子供一人で）	
	⑭ 何が（内容）、何で分かったのか（方法）を振り返る活動を設定することができる。	
	⑮ 次時につながる学習意欲を喚起するための工夫をすることができる。	
全体	⑯ 主眼・ねらい達成に向けて、ICTを効果的に活用している。	
	⑰ 子供の思考の流れや学習過程を踏まえた構造的な板書をすることができる。	
	⑱ 自分の考えの付加・修正・強化が見えるノート指導を行っている。	
	⑲ 活動に応じた学習形態（ペア・グループ・全体等）を工夫することができる。	
	⑳ 教科間で基本的な学習過程（探究的な学習過程）が統一されている。	

【資料４　授業チェックリスト山春Ｖｅｒ.】

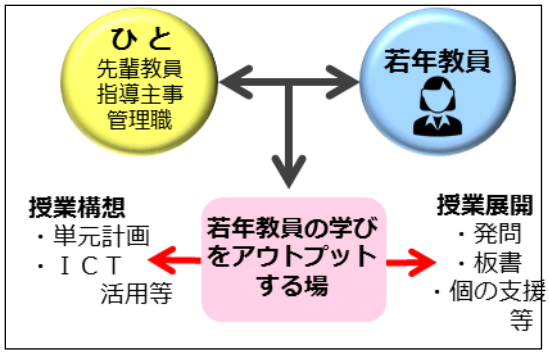
【表２　　仮説検証の視点と方途】

視　点		実　証　方　法
視点１	○　若年教員の課題やニーズに応じたコーディネートの工夫は、授業づくりに没頭することにつながったのか。	○　学びのアウトプット時の若年教員の反応 ○　先輩教員等からの学びを授業実践に生かそうとしている姿
視点２	○　設定した目標に応じた週案の活用の工夫は、アドバイスから活力を得ることにつながったのか。	○　単元終了時の若年教員へのアンケート ・週案のコメントは、授業構想の役にたったか ・週案のコメントで、やる気がでたか
視点３	○　若年教員の実態に応じたリフレクションの工夫は、授業実践に対する熱意をもつことにつながったのか。	○　リフレクション時の若年教員の反応 ○　リフレクション後の若年教員の感想

５　研究の構想

（１）若年教員の課題やニーズに応じたコーディネートの工夫（視点１：没頭させるため）

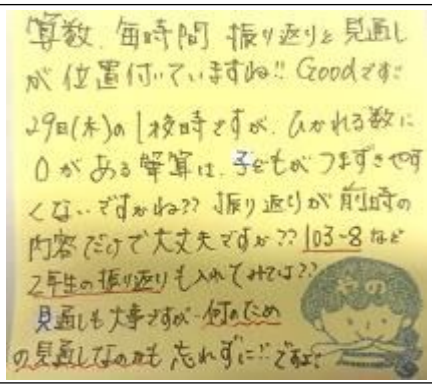
若年教員の育成を図るに当たり、主幹教諭だけで行うには、限界がある。そこで、全職員で若年教員に関わり、若年教員が教育に没頭できるように、専門的知識をもつ先輩教員等から学ぶ機会をコーディネートし、そこからの学びをアウトプットする場を設定する。そうすることで、学びの具体化を図り、授業構想や授業展開に生かすことができると考える（図４）。



【図４　主幹教諭のコーディネートの工夫】

（２）設定した目標応じた週案の活用の工夫（視点２：活力を与えるため）

若年教員が活力を維持しながら授業実践に取り組むことができるように、毎週提出される週案において、設定した目標に照らし合わせてコメントをしたり、参考になる資料等を添付したりするようにする（資料５）。そうすることで、訪問する授業以外の授業構想、授業展開にもつながり、設定した目標を意識した授業づくりを行うことができると考える。

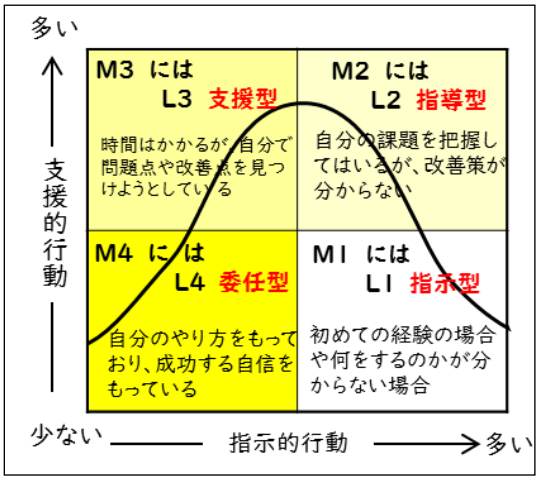


【資料５　週案の活用】

（３）若年教員の実態に応じたリフレクションの工夫（視点３：熱意をもたせるため）

若年教員に関わっていくためには、若年教員の実力の程度を把握したうえで支援を行う必要がある。そこで、若年教員の実態を資料６（国際メンタリング＆コーチングセンターが作成したモデルを参考）を基に捉え、資料７（福岡県教育センターが作成したモデルを参考）を基に次の手順でリフレクションを行うようにする。

① 目標に係る活動を振り返る
② その時の子供の様子を振り返る
③ その時の手立てや自分の行動を振り返る
④ これからの実践に向けて



【資料６　開発レベルの判別法と支援の方法】

若年教員の開発レベル	Ｍ１ 熱心な初心者	Ｍ２ 迷える学習者	Ｍ３ むら気な貢献者	Ｍ４ 優秀な働き者
リフレクションのスタイル	Ｌ１　指示型	Ｌ２　指導型	Ｌ３　支援型	Ｌ４　委任型
	主幹教諭等主体の指導		**若年教員主体の支援**	
若年教員の指導と支援	ほとんど指導、多少の支援	指導がまだ多い	支援が中心指導も少ない	多少の支援権限の付与
話合い	主幹教諭等が語り聴かせる	若年教員の意見を取り入れる	じっくりと話し合う	報告程度ですます

【資料７　開発レベルに応じた個に応じた支援の方法】

資料６資料７を基に捉えた若年教員Ａ、Ｂの実態及びリフレクションの方法を以下に示す。

若年教員Ａ：Ｍ１「熱心な初心者」

→　若年教員Ａの振り返りを基に、できていたことを付け加えながら主幹教諭も一緒に振り返りを行う。特に、③の手立てや自分の行動を振り返る際は、できていたこと、できなかったことの根拠を主幹教諭が伝えながら振り返りを行う。また、④のこれからの実践に向けては、若年教員Ａの思いを整理し、すぐに実践に移せるよう具体を示しながら伝わるようにする。

客年教員Ｂ：Ｍ３「むら気な貢献者」

→　若年教員Ｂの活動に対する思いや根拠を確認しながら振り返りを行う。特に、③の手立てや自分の行動を振り返る際は、よさを主幹教諭が伝えながら振り返りを行う。また、④のこれからの実践に向けては、若年教員Ｂが考えたことを尊重し、その活動がよりよくなるポイントを助言する。

【　図５　研究構想図　】

６　研究の実際

（１）実践Ⅰ

若年教員Ａの授業実践プランを活用した社会科の授業づくり

①　本実践で目指す若年教員Ａの具体的な姿【授業実践プランの指導計画から（８頁参照）】

○　一単位時間ごとにめあてを設定し、めあてに対応した考えを子供にもたせたり、まとめを考えたりすることができる。【授業構想】
○　子供の思考を促す発問をしたり、子供の発言を整理しながら板書したりすることができる。【授業展開】
○　授業中の子供の姿から授業実践を振り返り、目標に対する成果や課題を考え、課題解決の方法を考えようとすることができる。【授業の評価・改善】

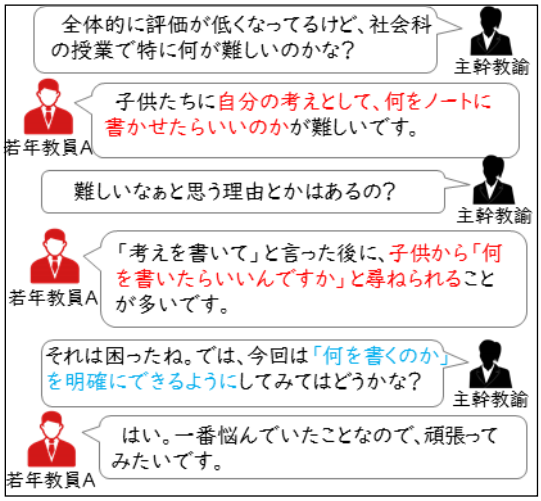
②　若年教員Ａとの相談会

【ねらい】　社会科の授業実践を振り返り、自分の授業課題を基に、授業で重視する活動を設定し、単元の見通しをもつことができるようにする。

若年研修イ研を数回実施した五月の中旬に、若年教員Ａとの相談会を実施した。本人の一番の悩みは、「社会科の授業をどのようにしたらいいのかが分からない」だった。そこで、若年研修イ研の時間を中心に、授業実践プランを作成し、社会科の授業づくりを行うことにした。まずは若年教員Ａの授業を、チェックリストを活用しながら振り返り、授業実践プラン（指導計画）の作成を行った（14 頁資料８）。

若年教員Ａと目標を決めると、この目標を達成するために、単元を通して毎時間行うこと（授業構想）、授業を行う際に若年教員Ａが特に意識して行うこと（授業展開）、重視する子供の姿（授業評価）の内容を一緒に考え、若年研修イ研の日程と照らし合わせて参観する授業を設定した。
※若年教員Ａの若年研修に合わせて、本実践は二単元を通して実施することとした。

若年教員と指導計画を作成した後、主幹教諭が指導計画に基づいた支援計画と評価計画の作成を行った（８頁参照）。



【　資料８　若年教員Ａとの目標決め　】

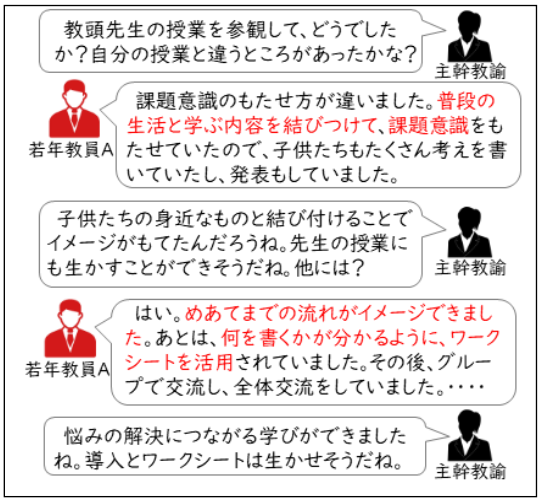
③　教室訪問①に向けて

ア　授業構想、授業展開の支援【視点１：コーディネートの工夫（没頭させるため）】

【ねらい】　先輩授業を参観することを通して社会科の指導法や考えのもたせ方を学び、自らの目標達成に向けた授業構想に没頭することができるようにする。

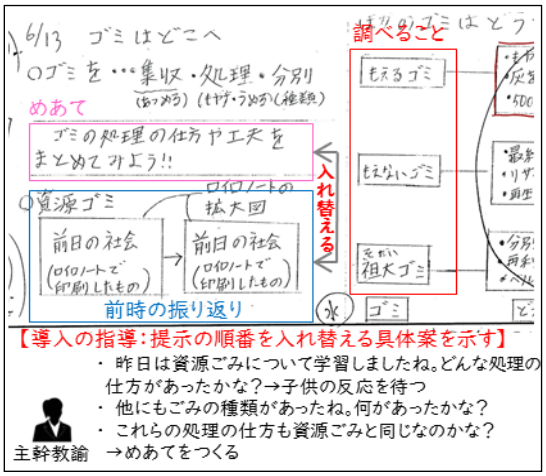
若年教員Ａに社会科の授業のイメージをもたせるために、先輩授業（教頭先生）の参観を計画し、実施した。何を重点的に参観するのか（課題意識のもたせ方、考えを書かせる前の発問）を確認し、３年生の授業を参観した。参観後に、教頭先生から授業のポイントや社会科で大事にすべき点（見方や考え方）を指導いただいた。

その後、若年教員Ａの学びをアウトプットする場を設定し、参観しての学びや自分の社会科の授業に生かすことができることなどを整理し、自分の授業実践への位置付けを行った（資料９）。



【　資料９　学びのアウトプット　】

先輩授業での学びを生かして、訪問する授業の準備を行った。資料 10 は、若年教員Ａが作成した板書計画の一部である。子供が何を書くのかが分かるように、「燃えるごみ」「燃えないごみ」「粗大ごみ」と調べることを出し合った後に、調べ学習を行う工夫がされてあった。そこで、その活動に入るまでの導入段階の流れを確認し、どんな発問をしたら、子供たちがすぐに自分の考えを書き始めることができるか、そのためにはどんな導入が必要かの案を示し、板書計画の修正を行った。

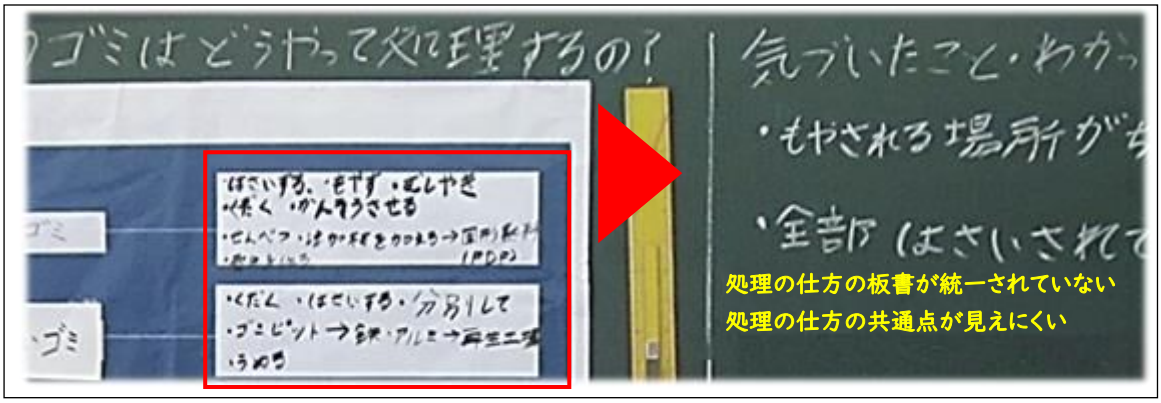


【　資料 10　板書計画の一部　】

イ　教室訪問①（若年研修イ研）

【ねらい】　資源ごみ以外のごみの処理の仕方を調べ、ごみの処理の仕方に共通していることを考えることができるように、導入や板書を工夫し、子供の思考を促すことができるようにする。

導入段階においては、事前の打ち合わせ通りに展開することができ、子供の発言を生かしながらめあてをつくることができていた。その後、資源ごみ以外の３つのごみの種類を確認した後、調べ学習を行った。資料を使っての調べ学習体験が初めてだったため、「燃えるごみ」の処理の仕方を一緒に整理したが、その際に子供から出た考えをそのまま板書してしまったため（資料 11）、若年教員 A が想定していた考えにまとめることができず、燃えるごみ以外の処理の仕方も曖昧な考えとなってしまった。その後、処理の仕方の共通点を探ろうとしたが、板書から共通点を見いだすことができず、時間内に学習をまとめることができなかった。



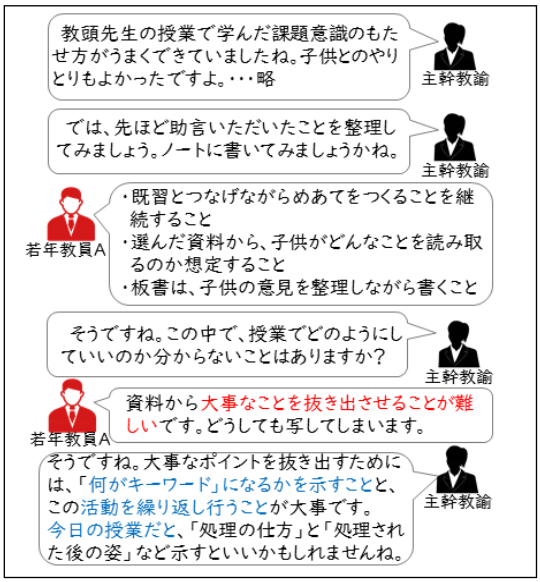
【　資料 11　教室訪問①の授業の板書の一部　】

ウ　教室訪問①後のリフレクション【視点３：リフレクションの工夫（熱意をもたせるため）】

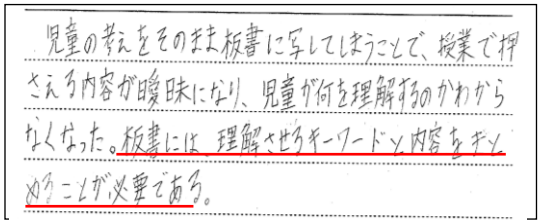
【ねらい】
授業実践プランに基づいた自他評価を行い、成果や課題を明らかにし、次の授業をよりよいものにしようとする熱意をもつことができるようにする。

事前に拠点校の指導教員と本単元で若年教員 A が目標としていることを伝え、その点も含め指導助言をしていただいた。

指導教員からの指導助言の後、若年教員とのリフレクションを行った。まずは、今日まで週案にめあてを記載することができていたことや先輩授業での学びを生かそうとしていたことを称賛した。その後、指導教員から助言されたことを整理させ、今後に生かすことができるように具体化が難しいことや分からないことなどを尋ね、解決策をアドバイスした（資料 12）。資料 13 は、リフレクション後の若年教員Ａの感想の一部である。



【　資料 12　授業後のリフレクション　】



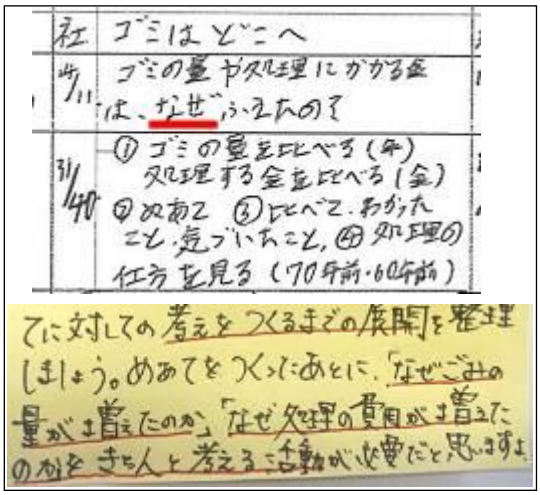
【　資料 13　リフレクション後の感想　】

③　教室訪問②に向けて

ア　授業構想、授業展開の支援【視点２：週案の活用の工夫（活力を与えるため）】

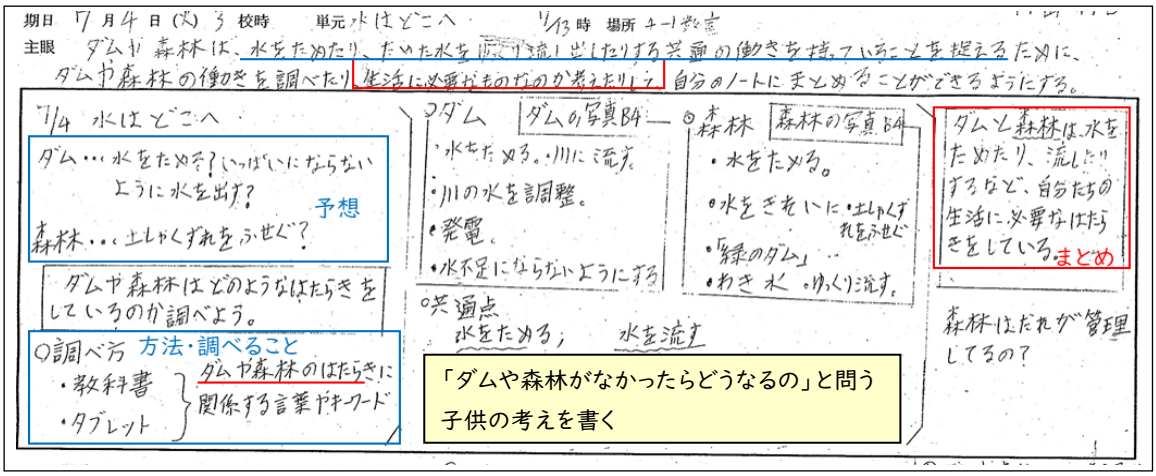
【ねらい】　自らの目標達成に向けたアドバイスから活力を得て、授業実践に生かすことができるようにする。

本単元の実施中は、週案において社会科を中心にコメントを行った。特に、若年教員Ａの目標である「子供が何を考え、何を書くのか」の参考になるように心掛けた。資料 14 は、提出された週案に対してのコメントである。子供の思考を促す「なぜ」を使ってめあてをたてていることを称賛し、その後の展開についてアドバイスを行った。



【　資料 14　週案を活用した支援　】

教室訪問２の授業前（若年研修イ研前）に、板書計画（資料 15）を基に授業展開のシミュレーションを行った。まずは、前回に比べて主眼が明確になっていることや、導入での予想、調べる方法や内容を示していることを称賛した。次に、前回の改善点でもあった資料は、教科書の資料かタブレットで検索した資料を活用するとのことだった。最後に、主眼とまとめにある「生活に必要なはたらきをしている」ことをどうやって捉えさせるかが不明だったため、そこにつながる発問（展開後段）を考えさせた。しばらく考えていたが、若年教員Ａから「難しいです。」とのことだったので、「私だったら『ダムや森林がなかったらどうなるの』と尋ねるかな。」とアドバイスすると、その発問に納得をしていたので、板書計画の修正を行った。

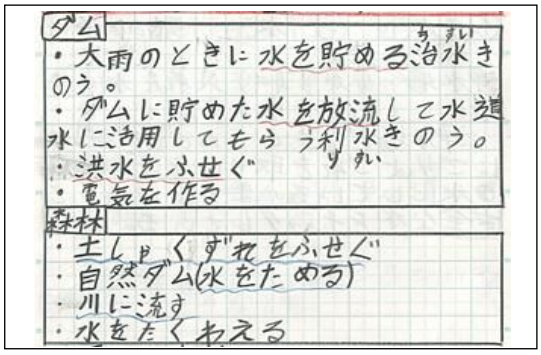


【　資料 15　教室訪問②板書計画　】

イ　教室訪問②（若年研修イ研）

【ねらい】　ダムや森林のはたらきが、私たちの生活に必要なものであることを捉えさせるために、板書や発問を工夫し、子供の思考を促すことができるようにする。

授業の導入→めあて→調べ方までは子供とやり取りをしながら予定通り展開することができ、子供から「何を書くんですか」という質問も出ることはなかった。調べ活動では、自分で方法を選び調べる姿があったが、ダムのはたらきと森林のはたらきの両方を調べる時間がなく、一つしか書くことができない子供もいた。タブレットを使っての方法に少し不安を抱いていたが、検索ワード「ダムのはたらき」「森林のはたらき」を提示していたため、子供たちは自分で資料を選択し、それぞれのはたらきをできる限り短い言葉でノートに記していた（資料 16）。



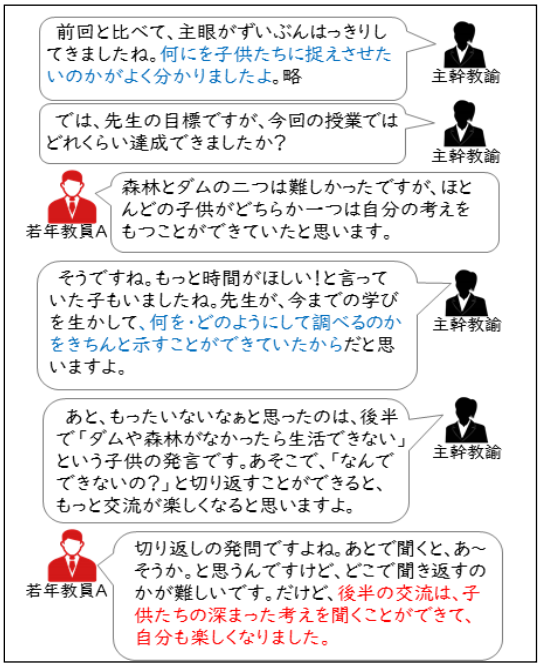
【資料 16　子供の学習のノート　】

調べたことを出し合う際は、子供の考えを聞いた後に板書をする姿があり、子供の考えが曖昧な時は、「～ということかな」と子供の考えを整理する姿もあった。展開後段の「ダムや森林がなかったらどうなるの」の発問後は、グループで考える時間を設け、全体で共有することができていた。

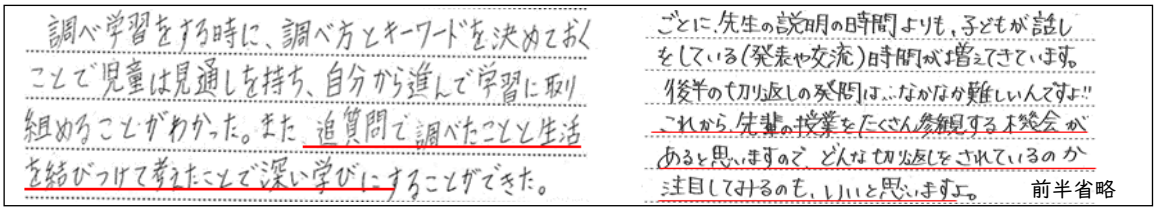
ウ　教室訪問②後のリフレクション【視点３：リフレクションの工夫（熱意をもたせるため）】

【ねらい】　授業実践プランに基づいた自他評価を行い、前回の授業からの成長を実感し、今後の授業実践に対する熱意をもつことができるようにする。

指導教員からの指導助言の後、若年教員とのリフレクションを行った。まずは、前回の授業よりも主眼がはっきりし、子供が意欲的に学習に取り組んでいたことや前回の課題でもあった板書も、子供の考えを整理しながら板書できていたことを称賛した。次に、若年教員Ａの目標に対しての評価がなぜよくなったのか、その理由を授業の中の姿から伝えた。最後に、次からの実践への願いも込めて、展開後段の交流の仕方についてアドバイスを行った（資料 17）。その点に関しては、若年教員Ａも課題だと思っているが、発問を工夫することで、子供たちの意見交流がより活発になることを実感することができたようだった（資料 18）。



【資料 17　教室訪問②のリフレクションの一部　】

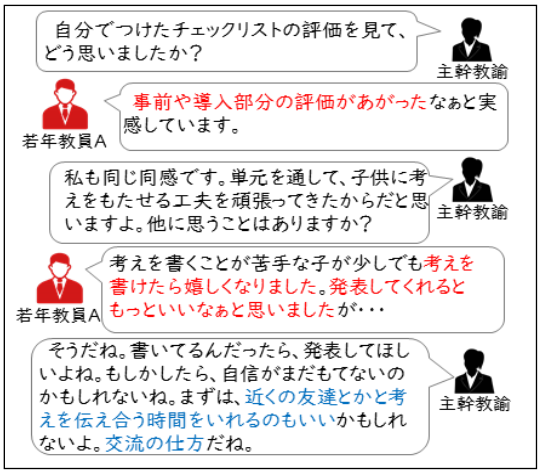


【　資料 18　リフレクション後の感想とコメントの一部　】

④　単元終了後のリフレクション【視点３：リフレクションの工夫（熱意をもたせるため）】

【ねらい】　授業チェックリストを基に、単元を通しての自分の成長を振り返るとともに、新たな課題解決に向けた意欲（熱意）をもつことができるようにする。

単元終了後に、授業チェックリストを用いて評価を行った。まだまだ評価が低いものもあるが、初めと比べて評価があがったことやその理由を具体的に伝えるようにした。また、もっとできるようになりたいという意欲を引き出すために、若年教員Ａが不安に思っていることに対して、具体的な解決方法を示しながらアドバイスを行った（資料 19）。



【　資料 19　実践後のリフレクションの一部　】

⑤　実践Ｉのまとめ

ア　若年教員の高まりについて

若年教員Ａの授業力の高まりを検証するために、授業チェックリスト（４件法）を用いて実践前と実践後の評価を比較した（資料 20 は重視する項目のみを抜粋）。

若年教員Ｂの自己評価が全て実践前よりも上がったのは、考えを書かせるためには子供に課題意識をもたせることが必要であることに気付き、そのための工夫や書く内容が焦点化されてきたため、自力解決の支援方法も考えることができるようになったからだと考える。

	実　践　前			実　践　後	
	若年教員	主幹教諭		若年教員	主幹教諭
⑤	2	2	⑤	3 ↑	2
⑥	1	1	⑥	3 ↑	2 ↑
⑧	1	1	⑧	3 ↑	3 ↑
⑨	2	2	⑨	4 ↑	2

⑤　課題意識を喚起するための工夫
⑥　子供の課題意識からめあてをつくる
⑧　見通しをもとに自分の考えをつくる
⑨　自力解決のための支援や机間指導

【　資料 20　実践前実践後の授業力の変化　】

イ　具体的構想の有効性について

視点１	若年教員の課題やニーズに応じたコーディネートの工夫について	参観する視点を明確にし、先輩授業を参観することで、自分の課題解決のイメージをもつことができ、授業構想に没頭する姿が見られた。
視点２	設定した目標に応じた週案の活用の工夫について	【実践後アンケート】 ・週案のコメントは授業構成の参考になった　３：なった ・週案のコメントでやる気がでた　　３：でた
視点３	若年教員の実態に応じたリフレクションの工夫について	リフレクション後の感想から、課題を改善する方法を見いだすことができ、子供の考えを確かなものにしようとする熱意を感じることができた。

以上のことから、若年教員Ａは、自分が思い描く授業を構想することができ、意欲的に授業実践に臨み、実践した授業を基に授業を改善しようとする姿が見られたことが分かる。

このことは、三つの視点から具体化した構想は、若年教員Ａが授業づくりに没頭したり、授業実践への熱意や活力を高めたりする環境づくりに有効だったと捉える。

（２）実践Ⅱ

若年教員Ｂの授業実践プランを活用した算数科の授業づくり

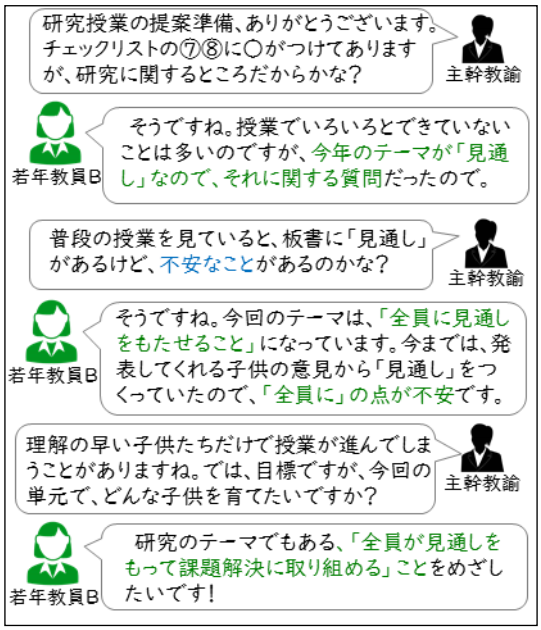
①　本実践で目指す若年教員Ｂの具体的な姿【授業実践プランの指導計画から（９頁参照）】

○　全ての子供が課題解決の見通しをもつことができるように、既習を振り返るための工夫を考えることができる。【授業構想】
○　本時の問題と類似した既習の学習を想起させ、一人一人が見通しをもつための時間を設定し、自力解決する活動を設定することができる。【授業展開】
○　授業中の子供の姿から授業実践を振り返り、目標に対する成果や課題を考え、課題解決の方法を考えようとすることができる。【授業の評価・改善】

②　若年教員Ｂとの相談会

【ねらい】　算数科の授業実践を振り返り、研究主題に応じた課題を自覚するとともに、課題を基に授業で定着させる活動を設定し、単元の見通しをもつことができるようにする。

研究主題も決まり、提案授業に向けて準備を始めた五月中旬に若年教員Ｂとの相談会を実施した。授業チェックリストを活用し、授業の振り返りを行い、授業実践プランの目標を立てた。目標を立てる際は、若年教員Ｂが自ら目標を設定できるように声かけを行った（資料 21）。その後、指導計画を一緒に作成し、子供が見通しをもつためには、どんな活動が必要なのか、その活動が定着するためにはどんな授業展開を行っていけばいいのかを計画した。その際、若年教員Ｂから、「いろいろな先生から助言をいただきたい。」との希望もあったので、その点も踏まえて、主幹教諭が支援計画と評価計画を作成した（９頁参照）。



【　資料 21　若年教員Ｂとの目標決め　】

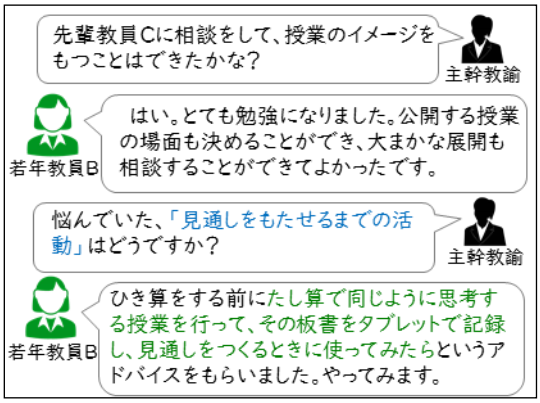
③　教室訪問①に向けて

ア　授業構想、授業展開の支援【視点１：コーディネートの工夫（没頭させるため）】

【ねらい】　先輩教員や指導主事からの助言を基に、提案授業の具体化を図るとともに、単元の展開の見通しをもち、授業構想に没頭することができるようにする。

若年教員Ｂが安心して提案授業を行うことができるように、まずは先輩教員Ｃに授業構想の相談を行った。先輩教員Ｃは、前任校で少人数指導（算数）を行っていたため、教材研究や単元の展開の仕方など、若年教員Ｂの質問に対して、丁寧に答えてくれた。また、一番の悩みであった、本研究のテーマに合う授業内容はどこであるかについても一緒に考えてくれて、若年教員Ｂも先輩教員Ｃの意見に真剣に耳を傾けていた。

先輩教員Ｃからの学びをアウトプットする場では、今後若年教員Ｂの相談にものれるように、学びの共有を行った（資料 22）。研究構想にあてはめながら授業の展開を確認し、次は研究構想も含めて、授業構想を指導主事に助言をいただいたらどうかということを伝えると、「是非お願いします。」とのことだったので、２週間後に指導主事に助言をいただく場を設定した。



【　資料 22　学びのアウトプット　】

提案授業の指導案と研究構想を基に、市教育センターの指導主事からの助言をいただいた。主幹教諭も同席をし、指導主事から助言されたことを確認しながら指導案の改善を図った。特に、若年教員Ｂの目標でもある「見通しのもたせ方」については、先輩教員Ｃからの助言を生かすことと「見通しを選ぶ」ことについて助言をいただいた（資料 23）。助言後の若年教員Ｂの学びのアウトプットでは、見通しをもたせるまでの展開の確認を行った。

【　資料 23　指導主事からの学ぶ様子　】

イ　教室訪問①（校内研究提案授業）

【ねらい】　３位数－３位数のひき算の仕方を考えるために、前時の３位数＋３位数の学習を振り返ることで自力解決につながる見通しをもつことができるようにする。

導入の見通しをもたせる活動では、前時までの板書をタブレットで振り返ることで、全員が見通しをもつことができていた（資料 24）。ただ、見通しを考えるのではなく、前時の見通しを写していた子供もいたという点は、授業整理会の時に参観された先生から意見として述べられていた。その後、子供たちは見通しを基に、自分で解決方法を選択し、自力解決に臨むことができていた（資料 25）。中には、前時の板書をタブレットで表示し、板書された考えの書き方を参考にしている子供も数名いた。

【　資料 24　前時の板書を基に見通しをたてる子供の姿　】

【　資料 25　考えを言葉で表現する子供の姿　】

考えを交流する活動では、見通しを基に３つの考えが出され（21 頁資料 26）、どの考え方が「早く」「簡単に」「正確に」解くことができるのか、追事象で試しながらよりよい考え方をまとめようとする姿が見られた。

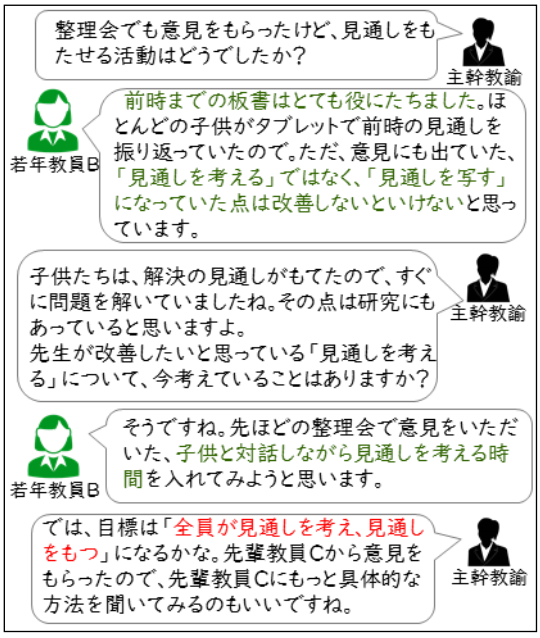
【　資料 26　教室訪問①の授業の板書　】

ウ　教室訪問①後のリフレクション【視点３：リフレクションの工夫（熱意をもたせるため）】

【ねらい】　授業実践プランに基づいた自他評価を行い、成果や課題を整理し、先輩教員等の助言を生かしながら、次時からの授業で実践しようとする熱意をもつことができるようにする。

提案授業の整理会後にリフレクションを行った。整理会にて、見通しをもつ活動の子供の姿等は出されていたので、手立ての振り返りを中心に行った。

若年教員Ｂの目標でもある「全ての子供が、課題解決のための見通しをもつことができる」（９頁参照）は達成されているが、整理会での「見通しをもつではなく、見通しを写す」という意見に納得をしている様子だった。そこで、若年教員Ｂからの改善案を基に、「全員が見通しを考え、見通しをもつ」という目標を設定した（資料 27）。単元計画を確認すると、思考を重視する内容が次週に予定されていたので、その日を教室訪問②にすることにした。



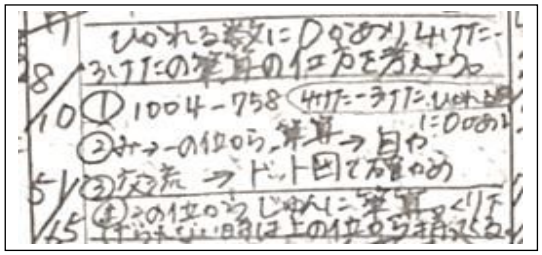
【　資料 27　教室訪問①後のリフレクション　】

③　教室訪問②に向けて

ア　授業構想、授業展開の支援【視点２：週案の活用の工夫（活力を与えるため）】

【ねらい】　自らの目標達成に向けたアドバイスから活力を得て、授業実践に生かすことができるようにする。

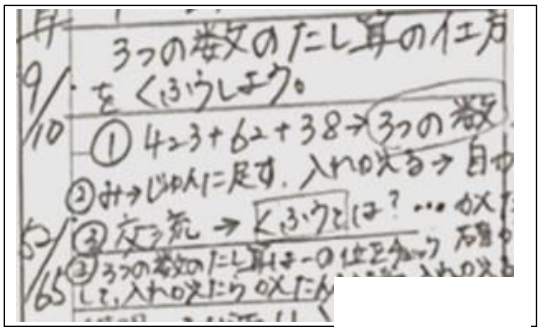
若年教員Ｂには、見通しのもたせ方を中心に週案で助言を行うようにした。資料 28 のように、毎時間見通しが示されていた。しかし、この時間の問題は子供がつまずきやすい内容でもあったので、自力解決のためには、103－8といった問題の振り返りについてアドバイスをした。



【　資料 28　若年教員Ｂの週案　】

「見通しをもつことは大切ではあるが、何のための見通しなのかということも忘れずに！」というメッセージを最後に付け加えると、週案を見た若年教員Ｂから、「授業のどの段階で２年生で学習した 103－８の問題を位置付けたらいいですか。」と相談された。そこで、今日の問題の十の位が０であることを確認した後に、「今まで似た問題を解いたことない？」と子供に尋ね、２年生の学習を振り返ってみてはどうかとアドバイスをした。

訪問する授業に関しては、週案の内容では見通しのもたせ方が分からなかったので、自力解決をするまでの展開を若年教員Ｂと一緒に確認をした（資料 29）。若年教員Ｂからは、「３つの数の計算なので、２年生の学習を振り返り、子供とやり取りをしながらやってみます。」と前回のリフレクション後に先輩教員Ｃから学んだ子供とのやり取りや前時で行った２年生の学習の振り返りを生かすとのことだったので、その展開を見守ることにした。

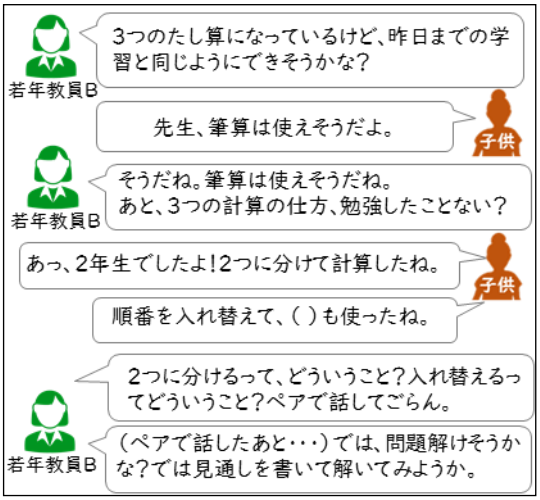


【　資料 29　教室訪問②の週案内容　】

イ　教室訪問②

【ねらい】　３位数＋２位数＋２位数の計算は、既習の順番を入れ替え（　）を使うと「簡単に」「早く」解くことができることに気付かせるために、既習を振り返る子供とのやり取りを行うことで、自力解決の見通しをもつことができるようにする。

いつものように、前時との違いからめあてを立てたあとは、前日に確認した子供とのやり取りで見通しをもたせていた（資料 30）。また、ペアで２年生での学びを確認し合うことで、見通しの意味を理解することができた子供もいた。見通しの筆算から、３つを同時に筆算したり、順番に足していったりする子供もいたが(資料 31 青枠)、順番を入れ替えて（ ）を使って解くと暗算でも解けるという考えに多くの子供が納得をし、追事象（資料 31 赤枠）では（ ）を使って問題を解く子供が多く見られた。



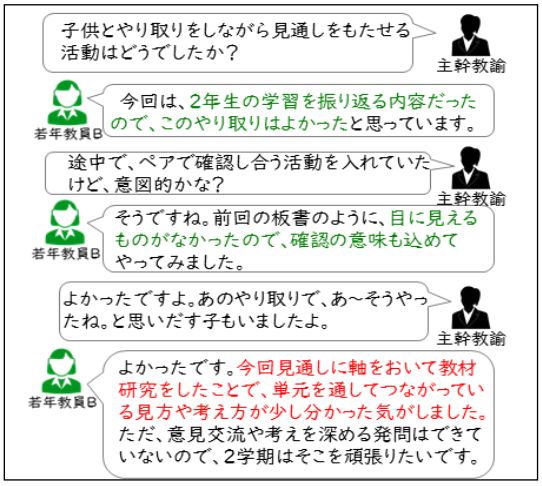
【　資料 30　見通しをもたせるまでのやり取り　】

【　資料 31　教室訪問②の板書　】

④　単元終了後のリフレクション【視点３：リフレクションの工夫（熱意をもたせるため）】

【ねらい】　授業チェックリストを基に、単元を通しての自分の成長を振り返るとともに、新たな課題解決に向けた意欲（熱意）をもつことができるようにする。

教室訪問②後の授業は単元の終末であったため、授業後と単元後のリフレクションを一緒に行った。授業チェックリストの自己評価では、導入段階の評価が全て４になっていた。その評価の根拠も聞きながら、本時の授業を振り返った（資料 32）。リフレクションの最後の若年教員Ｂの言葉から、目標達成に向かうことで、「若年教員Ｂが算数科の学習を楽しむことができるようになっていたこと」を教材研究に没頭する姿からも伝わってきたことをも伝え、次の実践に向けて熱意をもつことができるようにした。



【　資料 32　教室訪問②後のリフレクション　】

⑤　実践Ⅱのまとめ

ア　若年教員Ｂの高まりについて

若年教員Ｂの授業力の高まりを検証するために、授業チェックリスト（４件法）を用いて実践前と実践後の評価を比較した（資料 33 は重視する項目のみを抜粋）。

ほとんどの項目で評価が上がっているのが分かる。特に、⑥の課題意識からめあてをつくることが２ポイント上がっているのは、見通しをもたせるために、導入部分を学習内容に応じて工夫をしたからだと考える。

	実　践　前			実　践　後	
	若年教員	主幹教諭		若年教員	主幹教諭
⑤	3	3	⑤	4 ↑	3
⑥	2	2	⑥	4 ↑	3 ↑
⑦	2	2	⑦	4 ↑	3 ↑
⑧	3	3	⑧	4 ↑	4 ↑
⑨	3	2	⑨	3	3 ↑

⑤　課題意識を喚起するための工夫
⑥　子供の課題意識からめあてをつくる
⑦　課題解決や学習方法への見通しをもつ
⑧　見通しをもとに自分の考えをつくる
⑨　自力解決のための支援や机間指導

【　資料 33　実践前実践後の授業力の変化　】

イ　具体的構想の有効性について

視点１	若年教員の課題やニーズに応じたコーディネートの工夫について	先輩教員Ｃに授業構想や展開の相談を行い指導案の作成を行い、その指導案を基に指導主事に助言を受けたことで、研究でねらう内容がより明確になり、授業構想に没頭する姿が見られた。
視点２	設定した目標に応じた週案の活用の工夫について	【実践後アンケート】 ・週案のコメントは授業構成の参考になった　４：とてもなった ・週案のコメントでやる気がでた　　４：とてもでた
視点３	若年教員の実態に応じたリフレクションの工夫について	単元後のリフレクションの内容から、目標達成に向けて自分なりに考えたことを実践しようとする姿が見られたと同時に、次の実践に向けての熱意を感じることができた。

以上のことから、若年教員Ｂは、授業でねらう具体的な子供の姿が明確になり、目標達成に向けて授業を構成し直し、次の実践に向けて意欲をもっている姿が見られたことが分かる。

このことは、三つの視点から具体化した構想は、若年教員Ｂが授業づくりに没頭したり、教育への熱意や活力を高めたりする環境づくりに有効だったと捉える。

7　全体考察

（１）若年教員の授業力の高まりについて

若年教員の授業実践力の高まりを検証するために、各実践前、実践後に調査をした「授業チェックリスト」（資料 34　11 頁資料４と同様のもの）の若年教員による自己評価と主幹教諭による評価である（資料 35）。数値は、授業展開ごとの結果の平均である。

資料 35 から、若年教員Ａ、若年教員Ｂともに各展開で評価が上がっていることが分かる。特に、二名とも重点的に取り組んだ導入段階と展開段階においては、ポイントの伸びが他の展開に比べると大きい。このことから、視点１、視点２、視点３に基づいた具体的構想は有効だったと考える。

若年教員授業チェックリスト～山春小学校Ver.～

４ あてはまる　３ どちらかと言えばあてはまる　２ どちらかと言えばあてはまらない　１ あてはまらない

展開	評価項目	評価
事前	① 子供がその時間に身に付けるべき資質・能力（主眼・ねらい）を明確にすることができる。	
	② 各教科の物事を捉える視点や考え方を意識して、授業づくりができる。	
	③ 子供が興味・関心をもつ教具（提示資料・具体物・ICT活用等）を設定できる。	
	④ ねらいにあった活動の時間配分を設定できる。	
導入	⑤ 子供の経験や知識のずれ等から課題意識を喚起するための工夫がある。	
	⑥ 子供の課題意識からめあてをつくることができる。（子供と一緒に・子供一人で）	
	⑦ 子供に課題解決や学習方法への見通しをもたせることができる。	
展開	⑧ 見通しをもとに、自分の考えをつくる活動を設定することができる。	
	⑨ 自力解決するための支援を準備したり、机間指導を行ったりすることができる。	
	⑩ 自分の考えを全体やグループで表現する場を設定することができる。	
	⑪ 子供の思考を促す発問（展開後段）をすることができる。	
	⑫ 子供の発言を整理しながら板書をすることができる。	
終末	⑬ めあてに対応したまとめをつくることができる。（キーワードを基に子供と一緒に・子供一人で）	
	⑭ 何が（内容）、何で分かったのか（方法）を振り返る活動を設定することができる。	
	⑮ 次時につながる学習意欲を喚起するための工夫をすることができる。	
全体	⑯ 主眼・ねらい達成に向けて、ICTを効果的に活用している。	
	⑰ 子供の思考の流れや学習過程を踏まえた構造的な板書をすることができる。	
	⑱ 自分の考えの付加・修正・強化が見えるノート指導を行っている。	
	⑲ 活動に応じた学習形態（ペア・グループ・全体等）を工夫することができる。	
	⑳ 教科間で基本的な学習過程（探究的な学習過程）が統一されている。	

【　資料 34　授業チェックリスト山春Ｖｅｒ．　】

若年教員Ａ実践前

	若年教員A	主幹教諭	平均
事前	1.75	1.25	1.5
導入	1.3	1.3	1.3
展開	1.8	1.4	1.6
終末	2.0	1.7	1.8
全体	1.8	1.6	1.7

若年教員Ａ実践後

	若年教員A	主幹教諭	平均
事前	2.5	1.75	2.1
導入	3.0	2.0	2.5
展開	3.4	2.2	2.8
終末	2.7	2.0	2.3
全体	2.4	2.0	2.2

若年教員Ｂ実践前

	若年教員B	主幹教諭	平均
事前	2.75	2.0	2.38
導入	2.3	2.7	2.5
展開	2.8	2.4	2.6
終末	2.7	2.7	2.7
全体	2.6	2.8	2.7

若年教員Ｂ実践後

	若年教員B	主幹教諭	平均
事前	3.0	3.0	3.0
導入	4.0	3.5	3.5
展開	3.4	3.2	3.2
終末	3.0	3.0	3.0
全体	3.2	3.4	3.3

【　資料 35　授業展開ごとに示した実践前と実践後の評価の変化　】

（２）成果

①　視点１　若年教員の課題やニーズに応じたコーディネートの工夫について

資料 36 は、実践後の視点１に関する若年教員Ａ，Ｂの感想である。若年教員Ａは学びを授業構想や展開に生かす際に学びをアウトプットする場が必要だったこと、若年教員Ｂは目標を軸とした一時間の授業を展開する上で学びをアウトプットする場が必要だったことが分かる。これは、指導計画一緒に考え、指導計画を共有することができていたからだと考える。

このことから、若年教員の課題やニーズに応じたコーディネートの工夫は、若年教員が授業実践に没頭することができる環境を創り出し、授業実践力を育む上で有効だったと考える

主幹教諭とはなしをしたことで、分かったと思っていたことが、分かっていないことに気付くことができました。そのあと、分かっていなかったことに対して、具体的に説明してもらえたので、たすかりました。　若年教員Ａ

指導主事の先生方からご指導いただいた後に、主幹教諭の先生と話をすることで、発問の仕方や板書の仕方は整理できていたけれど、子どもたちの交流の目的や方法については、考えが不十分であったと気づくことが出来ました。　若年教員Ｂ

【　資料 36　実践後の視点１に関する若年教員Ａ，Ｂの感想　】

② 視点２　設定した目標に応じた週案の活用の工夫について

資料 37 は、実践後に若年教員Ａ，Ｂに実施したアンケートの結果である（４件法による質問紙法　４：よくあてはまる　３；あてはまる　２：あまりあてはまらない　１:あてはまらない)。結果から、若年教員Ａ，Ｂとも週案のコメントを読み、目標達成に向けた授業改善や構想に生かすことができていたことが分かる。これは、指導計画を共有し、実施するにあたっての支援方法を具体化することができていたからだと考える。

質　問	若年教員A	若年教員B	平均
コメントは、授業構成の参考になった	3	4	3.5
添付された資料を授業に生かせた	2	3	2.5
コメントを生かして、授業を改善した	3	4	3.5
コメントを読んで、やる気が出た	3	4	3.5

【　資料 37　実践後のアンケート結果　】

このことから、設定した目標に応じて週案の活用を工夫することは、若年教員がアドバイスから活力を得ることができる環境を創り出し、授業実践力を育む上で有効だったと考える。

③ 視点３　若年教員の実態に応じたリフレクションの工夫について

資料 38 は、実践後の視点１に関する若年教員Ａ，Ｂの感想である。若年教員Ａは、課題を基に、その改善策を授業場面で具体的に示したことが次の実践につながったこと、若年教員Ｂは、新たにやってみたことが今後の授業実践に向けての自信につながっていることが分かる。これは、評価計画を指導目標と照らし合わせたり、若年教員の実態に応じたものを作成したりして、リフレクションを行ったからだと考える。

このことから、若年教員の実態に応じたリフレクションの工夫は、若年教員が授業実践への熱意を高めることができる環境を創り出し、授業実践力を育む上で有効だったと考える。

今日の授業の課題を活かすために具体的な方向性を示してもらい、授業がやりやすくなりました。先生と話すことで、何を大事にするのか見えた気がしました。

若年教員A

1回目の授業の後、先生方のご意見から「見通しのもたせ方」で迷っていた部分を整理していただきました。2回目の授業で「子どもたちの対話から見通しを立てる」という方法を取り入れて授業をやってみた事を価値づけていただき、今後の教材研究へのモチベーションがより高まりました。

若年教員Ｂ

【　資料 38　実践後の視点３に関する若年教員Ａ，Ｂの感想　】

（３）今後の課題

- 週案の活用において、添付した資料の活用が不十分であった。今後は、資料を早めに提供し、説明を加えながら、若年教員の授業構想に生かせるようにする必要があると考える。
- 限られた時間の中で学びのアウトプットやリフレクションを行うためには、空き時間や放課後の時間を有効活用するスケジュールを事前に作成する必要があると考える。

〈　参　考　文　献　〉

・令和の日本型教育の構築を目指して（答申）　令和　３年１月　中央教育審議会
・教職員の働き方改革指針　平成 30 年３月　福岡県教育委員会
・働きがいを高めて、真の「働き方改革へ」露口健司　令和４年 11 月　Benesse
・個別のリーダーシップとは　国際メンタリング＆コーチングセンター
・本気で寄り添い本気で育てるメンタリング　平成 30 年　福岡県教育センター
・授業者としての実践的指導力を高めるＯＪＴ　平成 23 年２月　中村学